

33 瀉血の歴史

○藤倉 一郎・藤倉 知子

医学の歴史の中で、古代から行われ一九世紀まで二〇〇年以上にわたった瀉血は、一九世紀、フランスのP・S・ルイによって、まったく無意味であることが証明されてから、殆ど行われることはなくなつたが、古代から中世、近代にわたつて広く行われていたということは、どういう意味があるのであろうか？

瀉血が行われるようになったきっかけは、河馬が病氣になつた時に尖つた葦を突き刺し、血を流して治しているのを見たからだとか、女性の月経が精神的緊張をときほぐすということから考えついたのではないか等といわれるが、その発生の由来は不明である。

ヒポクラテスも瀉血を治療の一部としており、時代が下がつてプラクサゴラスは瀉血を広く用いた。アリスト

テレスも瀉血の肯定派である。その他テミソン、ペロフイロス、アスクレピアデス、ケルススも瀉血を治療にもちいている。僅かにアテナイオス、エラシストラストが瀉血を否定している。

そしてガレノスが四体液説にのつとつて、瀉血の意味論を詳しく述べたため、中世、近代にわたる一五〇〇年間、瀉血はゆるぎない治療となり、真面目に瀉血の手法、方法、理論、効果などが討議されたのである。一五世紀に地理上の大発見がおこなわれ、やがてルネッサンスにいたつてガリレオの宗教裁判やコペルニクスの『天体の回転について』が出版される丁度そのころ、ヴェサリウスの『アブリカつまり『人体の組み立てについて』』が出版されたり、ややおくれてハーベイの『動物における心臓と血液の運動に関する解剖学的研究』というタイトルで出版された血液循環の小冊子が医学に革命をもたらしたのにも拘わらず、一七世紀の医学における治療といえは、瀉血、瀉下、食事制限、運動、それに植物、動物、鉱物性の薬物の使用など、過去の継続に過ぎなかつたのである。

さらに一八世紀聴診器の発明で有名なレンネックの時代になっても、ブルッサーは液体病理説は否定しながら、瀉血をすすめ、蛭による吸血を多用した。このためフランスの医師は、この時代、四〇〇〇万匹の蛭を輸入したといわれている。

一九世紀になってルイは「炎症病態における瀉血の効果についての研究」で瀉血の成績を数量的に分析して、瀉血法に致命的な打撃を与えた。そして、全ての治療法は科学的評価を受けなければならないと主張した。しかしながら、一九世紀の初頭、欧米の医療はなおも医療といえるほどのものではなく、利用できる治療法としては、食事、運動、休息、入浴、マッサージ、瀉血、乱切法、吸角法、発汗、嘔吐、瀉下、浣腸、燻蒸くらいしかなかったのである。薬物としてもキニーネ、ジギタリス、痛風のコルヒチン、阿片などで、多種多様の疾患に砒素合剤を用いていたのである。ロキタンスキーの弟子のスコダは病気の際の薬物投与、あるいは積極的な医療介入が殆ど役立たないことをみとめ、肺炎に偽薬を与えても、どのような治療をしても病気に何の影響もないことを証

明した。相変わらずはびこっていた瀉血、瀉下、嘔吐よりも何もしないほうが有益であったかもしれない。こうして長い歴史に支えられていた瀉血も、一九世紀も後半になってようやく下火になった。

(医療法人一期会藤倉病院)